冷徹社長に尽くしていたはずが

うっかり好き好き言いながら
オナニーしてるのが
バレて気付けば

本音だだ漏れ
激甘えっち

で身も心も
蕩かされちゃった話

「私に秘書など必要ない。きみをそのポジションにしたのも、単に体裁でしかないからな」

氷のような冷たい視線が降り注ぐ。

わたしはそれを一身に受けながらも、決して怯むことなく見つめ返した。

「それは、わたしには、何もさせられないということでしょうか」

「……そういう意味ではない。きみには以前任されていた仕事があるはずだ。それをやればいい」

「以前の仕事は全て引き継ぎが済んでいます。藤堂社長、わたしは今期から社長秘書として配属されました。どんなことでも構いません、サポートをさせていただけませんか」

「……どうしてもか」

「はい、どうしても」

「……なら、掃除くらいはしても構わない。置いてあるものの場所を変えないなら、だが」

仕方なさそうにふい、と顔を背ける社長に、どこか勝ったような気持ちになる。
掃除だろうが、何だろうがかまわない。藤堂社長に近付きたい――ずっとそう思っていた。

「承知しました、藤堂社長。これからよろしくお願いします」

たとえ冷徹に見えようとも。
わたしだけは、この人がどれだけ優しいのか、知っている。

――冷徹社長に尽くしていたはずがうっかり好き好き言いながらオナニーしてるのがバレて気付けば本音だだ漏れ激甘えっちで身も心も蕩かされちゃった話――

「……随分と甲斐甲斐しいな、きみは。スーツよりメイド服の方が、似合うんじゃないか？」

あれから一週間。

社長室の机という机、床という床、棚という棚を掃除し終えたところで社長が口を開いた。

「そうでしょうか？　着ろと仰るのであれば着ますが、丈はどれくらいがお好みで」

「やめてくれ、冗談に決まっているだろう。きみは私を秘書にコスプレさせる変態社長に仕立てる気なのか」

「わたしはそんな社長でも受け入れますが」

「きみではなくて世間の目の問題だ」

はあ、と盛大なため息を吐かれてしまった。整った顔立ちなのに、眉間に皺が寄っている。

ずいぶんと疲れているらしい。

コーヒーを淹れようと立ち上がって手を洗う。

掃除をしながら、少しずつ見て覚えはじめた。社長の仕事中の飲み物は決まって深煎りのブラックコーヒー。

熱いほうがお好きなようなので、蓋つきのカップを用意して出すようにしたら、文句も言わず飲んでいる。気に入ってくれたみたいだ。

「どうぞ」

「……ありがとう」

「いいえ、他に何か欲しいものや、仕事はありますか？」

「いや。結構だ」

「では、本日は三年以上前の書類のインデックスを付け直したいのですが。見たところ、日付がバラバラなところがありますので」

「……あまり位置をずらさないなら」

「承知しました」

初日だったら断られていたであろう提案だ。

深々とお辞儀をして顔を上げると、どこか憂いを帯びた切長の目元が瞬く。
気のせいかもしれないけれど……ほんの少しだけ微笑んでいるような気がした。
（やっぱり、好きだなぁ……）

――あの日、ひと目見てからわたしはこの人に惚れ込んでしまった。
藤堂　真一（とうどう　しんいち）さん。
近頃、破竹の勢いで業績を上げている我が会社の社長にして、わたしの好きな人である。
どこか日本人離れした掘りの深い顔立ちと色素の薄い目をしていて、背も高いから一見するとモデルさんみたいに格好いい。けれど実際は仕事人間で、陰ではお堅いとか冷徹とか、そんなようなことを言われている。
わたしは、そういうところもクールでかっこいいと思うんだけど――と一人考えながら、そそくさと立ち去って棚の整理を始めた。
（……えっと、この辺の日付がぐちゃぐちゃだったんだよね……種類も分類して……それで、インデックスがここから……）

おそらく今までは自分でか、部下の誰かがかわるがわるやっていたのだろう。基本的には綺麗に整理されているが、たまに法則性が乱れていて気になっていた。
わたしは結構こういうものの整理が好きだ。
集中して直していると――

「――君」
「……」
「春日君」
「は、えっ、わ、わたしですか！？」
「ほかに誰がいるんだ」

後ろに社長が立っていた。

「あ、足音くらい立ててください……！　というか、わたしの名前ご存知だったんですね」
「きみは私のことをなんだと思っているんだ。……先ほど、三年前と言っていたな、この日

の契約書類があれば確認したいのだが」
「ああ、はい、ちょうど先ほど直したところですよ。その日なら……」

言われた書類をすぐに取り出して渡す。
得意げに胸を張っていると、ふ、と小さな笑い声が聞こえてきた。

「……海外の映画で」
「はい？」
「毎朝、玄関から新聞記事を取ってくる賢い犬を見たことがあるが――それを思い出した」
「……はいっ？　わたしが、ですか？」
「ああ。きみを見ていて」

肩を揺らして笑っている社長。
……何だそれ。全然そんなんじゃないのに。

「わ、わたしはもっと色々できますよ……？！」

「く……はは っ、そうだな、すまない。書類をありがとう、助かった」

くすくす笑いながらさっさと行ってしまった社長を見てじわじわと頬に熱が昇る。

――ぜ、絶対からかわれてる……！

なんだかバカにされているような気がしないでもないのに、笑い顔が見れたのが嬉しくてドキドキしてしまった。

「ああそうだ、春日君……何だ、頬を抑えて。おたふく風邪か？」

「！？　いえ、何でも……っそれより、他に何かございましたか」

手で頬の熱を沈めようとしていると何故か社長が戻ってきた。

慌てて向き直る。

「今日は15時から先方との打ち合わせで、恐らくそのまま帰らない。夜の戸締まりをきみに頼みたい」

「もちろん構いませんが、打ち合わせは同行しなくてよろしいのですか」

「必要ない」

にべもなく断られてしまって少しがっかりする。打ち合わせに付き添うのも秘書の仕事だと思うのだが、そこまでは信用されていないようだ。

出来るだけ感情を抑えてわかりました、と頷くと、書類に視線を移しながら社長は言った。

「……明日の打ち合わせは同行してもらう。いくつかデータの用意とスケジュールの把握をしてもらいたい。のちほど詳しい内容を共有する」

「……！！　は――はい……っ！」

あ、また笑った。

大きな声で返事をしたのがそんなにおかしかったのだろうか。書類で顔を隠しているけれど散々その涼しげな目元を盗み見ていたわたしにはわかる。笑っている。

言われたことをメモしている間に、社長は足音もなく去ってしまった。

「……はあ……好き……」

社長はもういない。

夜も暮れた定時過ぎ、わたしはひとり社長室の鍵を握り締めて乙女のような呟きを漏らしていた。

社長が出掛ける前、机の中にある、スペア用のセキュリティボックスの番号を教えてもらった。入力して開けると、丁寧にブランド品のハンカチで包まれた鍵がそこにあったのだ。

ふわりと漂うウッディムスクの香りを感じて、思わず深いため息が漏れた。

(これごと持っていっても変じゃないし……バレない、よね……?)

上品な刺繍のされたハンカチを胸に抱く。無意味にきょろきょろと見回してからこっそりポケットに仕舞おうとして……もう一度だけすん、と匂いを嗅いだ。

（あ……、……どうしよ、なんか……変な気分になってきちゃった）

話す時はいつも少し距離を置いているから、こんなに間近で社長の匂いを感じたことはない。

社長のいないこの部屋に誰が入ってくることもない――そう思うほど、じわじわと沸き立つ欲があった。

隠れるように、ずるずるとその場に座り込む。

机の影で誰にも見えないし、ここにはカメラもない。少しだけ、日々頑張っているご褒美が欲しい。

「――……ん……っ♡」

する、とタイトスカートの中の内ももを撫でる。ハンカチひとつでなぜこんなにも興奮しているのかわからないまま、匂いを嗅ぎながらすりすり……♡　と自分で焦らすように足の付け根をなぞる。

（あ、これ……社長、に……抱き締められてる、みたいで……っ♡）

ハンカチで口を抑えると、ますます匂いが広がってたまらない。

絶対にしちゃいけないことをしているのに指が止まらなくて、パンツのクロッチをすり……♡　すり……♡　と、何度も往復してしまう。

「ん……っ……社長……、はぁ、ん……♡」

机に寄り掛かって目をつむる。いつもしているみたいにカリカリ♡　と、パンツの上からクリトリスを引っ掻く。

匂いのついたハンカチがあるからなのか、社長のことで頭がいっぱいになって、それが気持ち良くてどんどん高まってしまう。

「……ふぁ……っ、んん……っあ、これ……きもち、い……っ♡」

すりすり♡
カリカリカリ……♡
気持ち良くてどんどん箍が外れていく。夢中になって足を開いた。
はしたない恰好をしている自覚はあるけれど、こんなところで、という気持ちも相まって余計に興奮する。

「あ……、ん……っ♡　社長……社長、きもちい……す、き……っ♡」

ぴんぴんぴんっ♡　と、弾くみたいにクリトリスを引っ掻く。
快感でどんどん頭がバカになってきた。パンツがじわりと濡れ始めたのを感じて、わたしは直接パンツの中に手を忍ばせる。
その時だった。

「――今、好き、と？」

低く涼やかな声が響く。

全身から一気に血の気が引いた。

「えっ……はっ、あ、しゃ、社長……っ！？」

「きみは今、なんと言ったんだ」

恐る恐る振り向くとすぐ後ろに、驚いた様子の社長がいた。

――やばい、やばすぎる。

絶対クビになる……！！

「き、今日は、帰られないのでは……あ、いえ、も、申し訳ございません、こんな……っ」

「思ったより打ち合わせが早く終わったから帰ってきたのだが……まさか、きみが……こんなことをしているとは」

絶対怒ってる……！！
あまりの恥ずかしさに顔を見ることができないまま慌てて捲り上がっていたスカートを下ろして、少しふらつきながらその場を離れようとする。と、まるで許さない、というように腰を抱かれて引き寄せられた。
――ハンカチの時とは比べ物にならない、柔らかなムスクの香りに包まれる。

「春日君」
「ほ……本当に申し訳ございませんっ、わたし……もう明日から元の部署に戻りますから……っもう、姿は見せないようにします、から……！」
「春日君、落ち着きなさい」
「なので解雇は――っきゃ！？」

じたじたと逃げ出そうとするわたしをがっしりと抱えて社長の方を向かせられてしまった。ほとんど涙目の視界でよく見えないけれど――……怒って、ない？

「え、あ、……っ」

「解雇も異動もさせない、安心しなさい。ひとつ確認したい。きみは先程、好き、と言っていたな」
「あ……そ、そ、それは……っ」
「それは、私を好き……ということだろうか」

どうしてそんなことを聞くのだろう……と思いながら、こんな醜態をさらしておいてもう隠せないと感じて、観念したようにこくりと頷く。
瞬間、ふっと……いつもの冷たい空気が、和らいだような気がした。

「そうか。だからここで一人で……していた、と」
「う……はい……本当に、申し訳ありませんでした……っ、！？」

事実確認をするように呟かれてもう一度謝った瞬間だった。
ふわりと身体が浮き、あろうことか机の上に座らされてしまう。社長室の机に、だ。

「な……っ！？　何で、お、おろして下さい…！」

「教えてくれないか。私に、今ここで」
「は……っ？」
「きみが、何を考えてどんな風にしていたのか、知りたい」

――どうして。そんなの、できるわけない。
意味がわからなくてうろたえているうちに足の間に身体を入れられてしまった。
端正な顔が間近に迫る。掘りが深い眉間と幅の広い二重はまるで人形のように綺麗で、感情が読めない。

「む……無理です、そんな、できない……っ」
「今更か？　言っておくが、私はきみが座り込むくらいのころからきみの後ろにいたぞ」
「ぜ、全部…見られて……！？　尚更無理ですっ……っひ、！？♡」

すり……♡　と、社長の長い手が内ももをなぞる。
一度高まった身体は簡単に反応してしまって、混乱したまま腰を引こうとするともう片手で逃がさないとばかりに捕まえられてしまった。

「なら、質問に答えるだけでいい。ここを、触っていたな？」
「あ、っ……うぅ、……っあ、ぁ！？♡　だ、だめです、そこ……！」
「ダメ？　きみはここを自分で撫でて、気持ちよさそうにしていたように見えたが」

すり……♡　カリカリ……♡
社長の指の甲が、確かめるように優しく、足の付け根を辿ってパンツのクロッチに触れる。からかうみたいに、布越しにほんの少し膨らんだクリトリスをなぞられて腰がびくりと揺れてしまった。
「さ……触っていました、けど……！　社長、今は本当に、だめです……ゆび、汚れちゃいますから……っひ、んん……っ♡」
弱弱しくスーツを握って抵抗していると、涼しげな目元が細められる。ますます力を込めておまんこの筋をなぞられてひくひくと力がこもってしまう。

「汚れる……というのは、ここが濡れているから……か？」
「っあ♡　そ、そう……ですから、はなし、っふぁ、あっ♡」
「汚いものではないだろう……凄いな、少し触っているだけなのに……どんどん、滲んでくる」

こすこすっ♡　すり♡
すりすりすり……♡
もっと溢れさせようとするみたいに、クリトリスとおまんこの穴を何度も何度も往復されて頭が痺れる。
「も、だめです、そこばっかり……っあぁ、あっ♡　やめぇ、〜〜っっンん……っ♡」
「やめてほしい、という声ではないが……春日君、それは？　私の……ハンカチか？」
溢れてしまう声に慌てて口を抑えようとすると、握り締めていたハンカチに気が付かれてしまった。

「あっ、も…申し訳ございませんっ、その……鍵がこのハンカチに包まれていて…」
「ああ、なるほど……これで、私のことを思い出した、と？」
「……〜〜…っ、は、はい……」

　頷いたまま顔を上げられなくなる。触られているせいもあるけれど、顔だけでなく全身が熱を帯びるくらい恥ずかしい。
　何を言われるのかと思っていると、ふ……と、小さな笑い声と共に、見たこともない顔で微笑む社長がこちらを覗き込んできた。
　心音が早くなるのと同時に、布を押し上げているクリトリスをカリカリカリッ♡　と何度も甘く引っかかれる。

「な……っ、あ、あっ♡　まっ、っんん♡　あぅ、なん、でぇ…っ♡」
「つくづく……きみがいると調子が狂うな。まるで子犬のようにあちこち駆け回って、少し構えば飛び跳ねるほど嬉しそうで」
「は、えっ、なに……っんん、ゆび♡　とめ……っあ、あっ♡」
「かと思えばこそこそとハンカチを片手に一人でこんなことをして……。……本当に、健気

で――かわいい」

……へ…？

かわ、いい……？

驚きに固まっていたら、首筋に口付けられてびくりと身体が揺れる。大事なものに触れるみたいに何度も唇を押し当てられながら、する、とパンツの中に細い指が潜り込んできた。

ちゅ♡　ちゅう♡

すり…♡　こりゅ♡　ぬりゅぬりゅぬりゅ♡♡

ぬるぬるのクリを捕まえられて、先っぽを指腹でよしよしってするみたいに撫でられる♡

「ひっ、あっ、あぁっ♡　しゃ、ちょう♡　だめぇ、それ、きもちよくて…っ♡♡」

「よくしているんだ、きみを。ここがずいぶんと好きみたいだな……自分でよく触っているのか？」

「うぅっ♡　〜〜さ、さわ、って、ましたっ…社長のこと、考えて……っふぁ、あっ♡」

快感で頭が真っ白になる中、質問だけには答えようとこくこくと頷く。いつも無表情で涼しげな目が熱っぽく瞬いた。
額を合わされて間近で覗き込まれながら、くりゅくりゅ♡　と皮ごとクリトリスを押しつぶされて、腰が震える。
「どんな風に？　今みたいに、直接濡れた先っぽを撫でていたのか？」
「っひ、うぅ……♡　い……いつもは、パンツの上、からで……っ直接は、こわくて、っあぁ♡　ン、うぅ〜〜……っ♡」
ぬちゅ♡　ぬちょ♡
ぬる〜〜〜っ…♡　ぬる〜〜〜っ♡
つよくて、と言った瞬間に溢れた愛液を救って、裏筋からじっくりとクリトリスを撫で上げられる。何度も、何度も♡
頭が痺れるような快感に足がぴぃん……っ♡　と伸びてきてしまった。
「これくらいの方が気持ち良いか？　ふ……身体に力が入ってきたな。顔は、蕩けている

が」
「や、やぁ、見ないで、くださいぃ……っあ、ん、ん〜〜っ♡」
「私が見たくてやっているんだ。……見たところ、強い刺激も、嫌いではなさそうだがな」

こりゅこりゅ♡　こねこね♡
ぬりゅぬりゅぬりゅぬりゅっ♡♡
わたしの反応を確かめるみたいに今度は強い刺激が襲ってくる♡　愛液でとろとろの指で何度もこねこね♡　すりすり♡　されて、頭がばちばちしてきてしまった。
(だめ、社長の指だっていうだけで、おかしくなりそうなのに♡　強いのも弱いのもきもちいいよぉ……♡　ぬりゅぬりゅ撫でられる度におまんこきゅうきゅう締まっちゃう、あっ、あっ？　クリの皮、引っ張られてる♡　どうしよ…もっとすごいの、くる……っ♡)
ぐい〜っ♡　きゅっ♡
しこしこ♡　しこしこ♡　ちゅこちゅこちゅこっ♡♡
先っぽ以外被っていた皮を引っ張られて根元からクリトリスを捉えられ、おちんぽみた

いに扱かれてしまった♡
　あまりの気持ち良さに背筋を仰け反らせると、支えるように背中に腕を回されて、抱き締められる。

「ひぃっ…しゃ、ちょぉっ♡　それ、それだめぇ♡　きもちよすぎて、あたま、へんに…あっ、あぁ♡♡」
「見せてくれ。きみが変になっているところも、全て」
「うぅ、はずかし……っあ、あ！♡　も、だめ、社長、社長っ♡　うぅ、わた……わたひ、イっちゃう、からっ、っひ！？♡　や、やぁ、あ〜〜〜っ♡♡」

　必死に首を振るのに全然やめてくれない。それどころか一層手を休めることなくちゅこちゅこ♡　とぬるついた指で、根本から先端を捏ねられる。
　腰がへこへこ♡　へこへこ♡　と犬みたいに揺れはじめる。意志とは反して、身体がイく準備を始めてしまった。

「そんなに腰を揺らして……余程私の指が好きなようだな、きみのクリトリスは。少し指を

離すと媚びるようにすりすりと寄ってくるが、これは……わざとなのか？」
「ちが、かってに、身体が♡　あぁ♡　やめぇ、っあ、だめ、もぉ……っ♡」

すりゅすりゅ♡
こしこしこしこし♡　こりゅこりゅこりゅこりゅ♡
足先に力がこもる。もっともっとって言うみたいに浅ましく腰が揺れて恥ずかしい。でももう気持ちいいこと以外何も考えられない。

「あ、あ♡　イく♡　社長、もうだめ、イっちゃうぅ♡」
「構わない、全て知りたい。見せてくれ、私の指でイくところを。ほら、――イけ」

命令みたいに言われて、身体がぶる……っ♡♡　と震える。
絶え間ない刺激に両足がぴんっ♡　と伸びきって、思わず社長の背中に縋るように腕を回した。応えるように背中に回る腕に力がこめられる。

「あっ、社長♡　社長ぉっ♡　イくぅ、イく、イっちゃ、……っ～～～あぁ……っ♡♡」

――びくびくびくっ♡

とてつもない絶頂感と共にたらぁ……っ♡　と愛液が漏れ出る♡　腰が何度もビクついて、頭の先まで電流が飛び交うみたいな気持ち良さでいっぱいになる。

余韻に何度もビクつく身体を鎮めようとふぅふぅと呼吸を繰り返していると――広い社長室に突然、着信音が響いた。

社長が眉根を寄せながら身じろぐ。驚いて固まっていると、体制もそのままに、いつも通りの冷たい声が聞こえてきた。

「もしもし――ああ、私だが。すまない、移動中だった」

「っ……！？」

変わらない体制で、まだ社長の指はわたしのクリトリスに触れているのに。社長はそのまま、もう片手で電話に出てしまった。

予想外のことが起きすぎて混乱が落ち着く気配がない。

話しながら顔を見つめられて、思わず息を呑む。

「ああ、……なるほど。いや、その件で先ほど打ち合わせをしたのだが、結果的には――」
「っ！？　っ～～～♡　ゃ……っぅ……っ♡」

まだ余韻も残っているクリトリスをからかうみたいになぞられて肩がびくりと揺れた。携帯を持ったまま口元に人差し指を当てて静かに、とジェスチャーされる。

静かにして欲しいなら触るのをやめてくれたらいいのに、一向に離してくれる気配はない。

それどころか、指をもっと奥へと進められてしまった。

「……っ！！♡　く……っ、ぅ……っ♡♡」
「なので各支店への連絡はもう少し待っていてくれ、ああそうだ、支店長の――そう、彼からも――」

ずぷ……っ♡　ぬぷぷぷぷ……♡

いつも通りの仕事の話をしているのに、社長の指はぬかるんだおまんこにどんどん入っ

てくる。
　こんなに至近距離で話していたら呼吸すらも聞き取られてしまいそうで、いやいやと首を振ると仕方なさそうに「……すまない、一度ミュートにする」と声が聞こえた。
「……こらえきれないか？」
「っんぅ♡　社長、むり、むりです、っあ♡　こんな、近すぎて……っ♡」
「仕方ないな……ほら、これで抑えていろ」
　ハンカチを握り締めたままだったわたしの手ごと取り、口元に当てられた。
　やめてくれるわけじゃないことに焦りつつ、言われた通りにしないと、と思って必死に両手とハンカチで口を抑える。
　その姿を見て目元を緩めた社長はすぐに電話に戻っていってしまった。
　――ぐぬぬぬっ♡　ぢゅぷ♡
　とちゅとちゅとちゅとちゅっ♡
　おまんこのナカへと入った指が余すところなく内壁を擦っていく。腰が揺れてしまうと

ころを目ざとく見つけられて、何度もそこをこすられて視界に火花が飛び散る。

（あっ、あ♡　むり、これ、きもちよくて♡　声でちゃうよぉ♡　じぶんでナカまで指いれること、ほとんどないのに♡　なんでこんな、きもちいいの……っ♡）

社長はいつもどおりの冷めた口調で電話しながらわたしのことをずっと見ている。

恥ずかしいし、絶対声出さないように……迷惑をかけないようにしなきゃいけないのに。

我慢しきれずに声が出そうになる度に、熱っぽいまばたきをされてどうにかなりそうだ。

「ふーっ♡　ふぅ、〜〜っ……ぅ……っ、ん、…〜〜〜っ……♡」

「そうだな、それと今期の業績をまとめた資料を改めて提示して……今すぐ確認できそう？　ああ、わかった」

こりゅ♡　すりすり♡

とんとん♡　とんとんとんとんっ♡

一番奥のコリコリしたところを甘やかすみたいに撫でられて腰がヘコつき、口を抑えて

いた手が震えてハンカチが落ちてしまった。
呼吸も声も抑えきれなくて、無理だっていうみたいに社長にしがみついて首を振ると、社長は返事をしながら仕方なさそうに笑う。
そして――

「んむ、……ぅ……っ！？？」

柔らかく、唇を押し付けられた。
電話口の相手はどうやらミュートにしているらしい。
驚く間もなく、おまんこをぐちょ♡　ぐちょ♡　とかき回されているせいで口が半開きになって、すぐに舌まで入れられてしまった。

「んぅ……♡　んふ……ぅ〜〜っ♡　っは、んぅ……♡♡」

（うう、これ、だめ♡　キスと一緒におまんこずぽずぽされちゃうのだめ♡　頭の中も身体も社長でいっぱいでふわふわしちゃう……っあ、だめ、またイきそう♡　足ピンして即イ

きするの情けなさすぎるのに……ッ♡）

「っ……ああ、なるほど。いや……実はまだ移動中でな。落ち着いたら改めて連絡をするから、データを送っておいてくれるとありがたいのだが」

電話相手がミュートから戻ってきたらしく、唇が離れてしまった。

口さみしくなってしまって、社長にしがみついたまま、無意識に首筋へと唇を押し付ける。

甘えるみたいにちゅう、と吸うと――少し息を詰めた社長が、トン、と画面をタップして電話を切った。

ようやく声を抑えなくていいことにほっとしていると、机に乗り上げた社長にそのまま押し倒されてしまう。

「あ……っ、す、すみませ……わたし、声、おさえられなくて、っんぅ……っ♡」

「あまり煽らないでくれるか、……抑えが効かなくなる。それとも……子犬に待ては難しい、か？」

射抜くように視線を向けられながら囁かれて、降参するみたいにきゅう、と喉が鳴る。
「うぅっ、だって、ぇ♡　も……きもちよくて、っあぁっ♡　もぉ、イきそう、でぇ……っ♡♡」
「もう？　先程イったばかりだろうに。ここも一人で、触っていたのか？」
ぢゅぽっ♡　とん♡　とんとんっ♡
ここだって言うみたいに奥の弱いところを何度もタップされてわけがわからなくなる。
「ちが、ぁあ♡　触ってな…っ社長のゆび、だから……っんむ、ぅう……っ！？♡」
噛み付くようなキスが襲って視界がぼやける。
もうずっとイくのを我慢していてつらい。ひくひくと収縮する入口に社長の指が行き来するたびに気持ちいい。
唇が離れたあとも酸欠でぼーっとしていると、どこか余裕なく細いため息をついた社長

が掠れた声で言った。

「……今のは、きみが悪いぞ」
「はぇ、なにっ……あぁ！？♡　だめぇ、うぁっ、あぁっ♡　奥、奥ぅ♡　ずぽずぽだめぇ、またイく、イっちゃ…っ♡」
「誰の指で、イくんだ？」
「だれ……っぁあ♡　しゃ、社長っ♡　社長の指、で♡　あっ、イくぅ……っっ♡♡」

とちゅとちゅとちゅっ♡　と繰り返し奥をいじめられて身体が抗えなくなる♡
ぐっと背筋が弓なりに反れて、足が開いてぴぃんっ♡　と張って。
あ、だめ、出る……♡　って思ったけれど、もう遅かった。

「あっ、ぁぁあっ♡　社長……だめ、わたひ♡　出ちゃ、うぅ……〜〜〜っっ♡♡」

ぷしっ♡
ぷしゅ♡　ぷしゃあぁぁ……っ♡♡

止めることができずに、イったと共に盛大に潮吹きしてしまった♡♡

「――……すごいな」
「〜〜……は、ふぅう……っ♡　――あ……あっ！？　ごめ、ごめんなさい……っ、よ、汚しちゃって……！」

言いながらも、ちょろ、ちょろろ…♡　とまだ漏れてしまって恥ずかしい。いつしか大きくイく時には出てしまうようになってしまったのだけれど、こんなにたくさん出してしまうなんて。
のろのろと身体を持ち上げたら、社長のオーダーメイドであろうスーツがしたたかに濡れてしまっていた。

「ひえ……も、申し訳ございません……！」
「構わないが……これは……着替えなくてはな。きみも身体を流した方がいい。どこも痛くないか」
「は、はい、大丈夫です……っ」

濡れたところを確認しながらいつも通りの冷静な対応をされて一気に我に帰った。慌てて身を起こし机から降りると、スマートフォンの画面を眺めてため息をついている社長が見えた。
先ほどの電話の続き、だろうか。

「……春日君、身体が平気そうなら、タクシーを呼んでおいてもらえるか。一台でいい」
「は、はいっ、一台……？」
「きみには私の家のシャワーを貸す。ここから五分程度だ」
「えっ！？　そ、そんな……申し訳ないです、その、すぐ近くにネットカフェもありますし、」
「春日君」

文字通りあんな痴態を見せておいて、これ以上顔を合わせるのが忍びなくて首を振ると、屈んで顔を覗き込まれる。
先ほどキスをしたことを思い出してひゅっと喉が締まった。

「今のきみをひとりで帰したくはない。分かってくれないか」
「へ、…あっ、は……はい……？」
「分かったらタクシーを。私は少し電話をしてくる」

冷めかけていた頬の熱がまた灯る。
一人でしているところを見られて、私を好きということだろうか、という言葉に頷いてから……ずっと、言うことなすこと甘ったるくて、勘違いしてしまいそうだ。
（絶対遊ばれてるだけだと思うけど……っていうか待って、これから……え？　わたし、社長の家に行くの……！？）
どうしよう、と思うのに……どこかまた触れてもらうことを期待してしまう。
タクシーの予約を取りながら、疼く下半身を抑えるようにぎゅっとスカートの裾を握った。